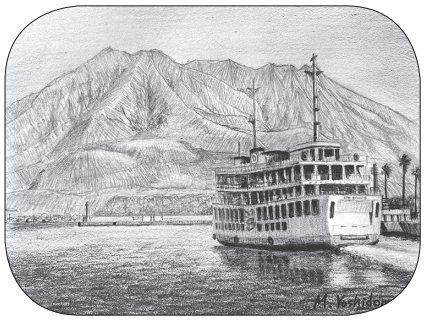
令和６年７月22日発行
通巻　第548号　７月号



令和６年度

鹿児島の教育

７月号

巻頭言

共生社会の実現に向けて必要なこと

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会特別支援学校長部会長
県立鹿児島特別支援学校長
堀之内　恵　司

少子化により学齢期の児童生徒の数が減少する中、特別支援教育に関する保護者等の理解や認識の深まりとともに、特別支援学校だけでなく小中高等学校等においても特別支援教育を必要とする児童生徒が年々増加している。文部科学省の発表によると、その数は近年で毎年約二万人から三万人ほど増加している状況にある。

学校教育においては、障害のある子供の自立と社会参加を目指した取組を含め、共生社会の実現に向けた取組が強く求められており、そのためにもインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進が必要とされている。

共生社会の実現に向けて、まずできることは障害を理解することである。病気や事故、高齢化などにより、障害は誰にでも生じ得る身近なものであることを理解する。障害の程度や障害の生じた時期により違いがある、障害は多種多様で同じ障害であっても一律ではないことを理解する。聴覚障害や心臓・腎臓等の内部障害、精神障害や自閉症等の発達障害など、外見では分からない・分かりにくい障害もあることを理解する。地域での自立した生活や就労など、不自由はあるが周囲の理解や配慮があればできることが多いことを理解する。共生社会の実現に向けて、まずは社会のみんなに障害を理解していただきたいと考えている。

障害を理解することは、日常や事業活動の中で配慮や工夫をしていくことにつながる。困っていそうな場面を見かけたら、「何かお困りですか。」と一声かけて、自分にできる範囲の手伝いをすることにつながる。商品やサービスを提供する際に、障害のある利用者もいることを考えながら提供する、また、当事者にどのような配慮が必要か聞いてみることにつながる。「障害があるから」と決めつけず、それぞれの個性や能力を活用することを一緒に考えることにつながる。このことが、障害の有無に関わらず、誰もが人格と個性を尊重し、支え合う社会、共生社会の実現につながると考えている。

そのために学校では、障害のある子供が、その能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加することができるよう、子供に対する教育の充実を図っていきたいと思う。また、医療、保健、福祉、労働等との連携を強化し、教育の充実を図っていきたいと思う。そして、障害のある子供が地域社会で積極的に活動し、その一員として豊かに生きることができるよう、障害理解を推進するとともに、周囲の人々が障害のある人や子供と共に学び合う社会づくりを目指し、積極的に取り組んでいきたいと思う。

令和６(2024)年 ７月号
一般財団法人鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679
㈲ アート印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844

＊おもな内容＊

巻頭言 …… 1
随想 …… 2
提言 …… 3
わが校の学校経営 …… 5
子どもが輝く教育 …… 7
心に残るひとこと …… 9
ある日の校長講話 …… 11
話のひろば …… 13
読書案内 …… 15
趣味・文芸 …… 18
郷土の紹介 …… 19
一般㈶県校長会館だより …… 20
編集後記 …… 20

随想

ただなんとなく。から生まれてくるものを

切り絵作家　郡山美保

わたしは、学校図書館の中で仕事をしています。図書館の中にいると、時の流れがなんとなく緩やかに感じます。その流れと共に常にカラフルな「音」が耳に届いてきます。幼い頃から二十代前半の頃まで音を作ることに集中していたためでしょう、普通の人とは聞こえ方が違うのかもしれません。その音には色がぼんやりと重ねられ、絵として頭に浮かんできます。

初めに断っておきますが、怪しいものではありませんのでご心配なく。

この仕事をしていますと、様々な読みものに触れる機会が多いわけです。ページを開くと、まず文字が、ぱっと目に飛び込み頭の中で音になります。だって、口には出しませんが、頭の中では自分の声。つまり、音として言葉を発しているわけですからね。

ある時ふと、その音を何か形にできないものか?と、考えます。切り絵はどうだろう?と。紙とはさみ（カッター）と糊。この三つの道具だけで完成されてしまうわけで、鉛筆をはさみ（カッター）に換えて描くだけです。ところで、本棚に並んだ本たちは、自ら「読んで!」と自己アピール、作者の思いを届けることはできるでしょうか?できませんよね。なので、ページを捲りその中にある「アピール」を、切り絵で表現をし、図書館の利用者様へ、先ずは視覚に伝えてみるのはどうか?と。平面に寝そべった文字を二・五次元化させ起こすわけです。そして、特大サイズのポップにし、図書館設営に活用する。作業はとても地味です。ですが、わたしと頭の中にあるイメージという生き物と対話をしているのです。その対話を形にしてそれを紙に落とす。それは、互いを解放するということであり、ある意味ウィンウィンな関係。常に友好な状態を保持する努力を怠らない。外野からは見えない音符が宙を飛んでいて喜怒哀楽が忙しく往来しています。つまり、目に見えない賑やかさがあるのです。十年以上続けてみてやっと少し自己分析が進んだかもしれません。こんな機会はほとんど無いに等しいでしょう。感謝!

こんな制作活動にスポットを当てていただく機会に昨年、今年と恵まれました。鹿児島市立天文館図書館での作品展開催。鹿児島県内に止まらず海外の方までと幅広い層の目に留めていただき、励ましの言葉を頂戴しました。後日館長から聞いて驚きましたが、千人以上の観覧があった。と、ただただ感謝しかありません。

けれど、人生は山あり谷あり。わたしの取組を応援してくれていた息子を、昨年夏に亡くしました。悲しい報せを受ける直前、読了したばかりの一冊を形にしようと、準備を始めたときでした。思考、手が止まります。けれど四十九日を終えた頃から、気持ちの整理のためにも取組を再開。時には涙で気持ちを洗います。自分の内面としっかり向き合うために集中することは大切なことであり、そして、心がたっぷりと汗を掻くような「生」を強く感じる究極の試練。

ここ直近で制作したものは大型絵本でしょうか。テーマは夏の「音」です。先日それを、福岡のあるイベントで読み聞かせとして使用。好評でした。次は図書委員が読書集会で使用し、読み聞かせをします。実りある夏になるように、と祈りを込めたプレゼントとして、そして、夏が好きだった息子にも届けたい。そんな思いをこっそり含ませています。

ただなんとなく。から生まれてくるものや、思いが、誰かの心にふわりと沁みこみ、潤いをもたらすことを信じて、制作を体力が続く限り進めてまいります。蛇足になりますが、この拙文が貴誌のページに載せられた時に遅咲きとなりますが切り絵作家として初デビュー。ということを書き添えて筆を置かせていただきます。

略歴

二〇〇四年　熊本音楽短期大学卒業、専攻科、研究科と四年間学ぶ（作曲専攻）

二〇二〇年　南九州市会計年度職員として南九州市立青戸小学校、粟ヶ窪小学校の学校図書館司書補として配置され在職中

十年、二十年後の近未来の学校を経営される校長先生へ

伊敷小（市）　堀之内　尚　史

一　はじめに

初任の頃、校長先生は親よりも年上で、立派な御老台という感じだった。自分がいざ校長になってみると、周りからどのように見えているのだろうと思う。昭和、平成、令和と教員生活を送り、今年度末に役職定年を迎える私にとって、「提言」という場をいただいて、少々困惑している。

超高齢化社会、少子化による人口減少の中、グローバル化や急速な情報化、技術革新等によって、学校も大きく様変わりするだろう。これまで、時代と共に変わる社会的ニーズに対応すべく、生活科や総合的な学習の時間、外国語活動や外国語科、道徳科が新設され、プログラミング教育等の〇〇教育が急増してきた。学校に求められる指導内容は、授業時数の増加でも対応しきれないほどである。

これから十年、二十年後、新時代の学校を経営する校長の姿を未来予想と共に想像しながら、提言というよりはエールを送りたい。

二　高度情報化の時代

私の初任校は、町全体で「パソコンの町」という看板を掲げ、コンピュータ教育に力を入れている町の学校だった。今では信じられないが、教室で一台又はコンピュータ室で二人に一台のパソコンをどのように活用するかを研究し、授業で使うソフトを教員が自作していた。五分程利用するソフトを二～三か月かけて作成していた。「これは教員がする仕事ではない。ソフトの企画は考えるが、プログラムはエンジニアが作成する時代が来る。」と考えながら。あれから四十年近い月日が流れ、この間に情報機器や技術は驚くべき進化を遂げている。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックで、ＧＩＧＡスクール構想が前倒しされ、学校のＩＣＴ環境は急変したが、市町村や学校の活用状況には、地域差や学校差も出てきている。そのような中で、ＧＩＧＡスクール構想は次なるステップに入ろうとしている。

三　ハイブリッドな思考

多様性の時代に、学校は一律一様の教育を進めることが難しくなっている。子供たちの実態が二極化から多極化し、発達障害等で支援の必要な子供も増加している。担任が一人で、学級の全ての子供に対応することは厳しくなっている。

このような状況の中で国が進める、誰一人取り残さない「個別最適な学び」の実現に向けては、様々な工夫が必要である。その一つに「ハイブリッドな思考」がある。二者択一ではなく、それぞれのよさを生かし、最適解を求めることである。

一斉指導と個別指導、個別学習とペア・グループ学習、アナログ教科書とデジタル教科書、鉛筆やノートと一人一台端末、紙のドリルとデジタルドリル、担任制と教科担任制、学級担任制と学年担任制、教室と多様な学びの場、対面授業とオンライン授業、リアルタイムとオンデマンド、リアル体験とバーチャル体験、先生とＡＩやロボット等、これらの二項対立にあるものをうまく融合させることが必要である。

校長には、教員が最適な教育活動を進められるように、家庭・地域と連携又は融合しながら、教育環境や体制の整備を行うことが求められている。

未来の学校は、様々な壁や枠が取り払われ、子供は各自のカリキュラムで、学びの場や方法を選択し、様々な人々と交流しながら学ぶようになるだろう。認知能力はＡＩで、非認知能力は交流や体験を通して育むというように。現在、全国で増加している通信制の高等学校も、未来の学校への流れだろう。

四　おわりに

変化に順応することは、簡単ではない。新時代は若い世代に任せたいところだが、教員不足や退職年齢の引き上げで、昭和世代がまだまだ頑張らなければならない。長年培われた教育観を大転換させて、目の前の子供と時代を見極め、ハイブリッドな思考でチャレンジできる学校づくりに御尽力いただきたい。

今こそ、交流し、語り合おう

犬田布中（大）　田之上　直　樹

一　はじめに

校長二年目の私が寄稿していいものか大変悩むところだが、コロナ禍が収束し、一年が経った今、本校で取り組んでいることを基に考えたことを提言させていただく。

二　本校（区）の現状

徳之島は、「ユイの島」を謳い、世界遺産に認定される自然が豊かで、人と人のつながりや人情を大切にする島である。犬田布中学校は、生徒が六十人在籍しており、ネット上のトラブルを始め生徒指導上の問題を起こす生徒はほとんどいない。生徒間の人間関係も相手がどのような性格かを汲み取り、接し方を考えて対応できる生徒たちである。

学習面でもＩＣＴ機器が積極的に活用され、授業中も学び合いや意見交流を通してしっかり理解して、鹿児島学習定着度調査では県平均以上の成績である。

しかし、家庭学習が短いという課題があった。私が赴任した当初の家庭学習時間は平均六十三分だった。家庭の協力を得られれば、生徒たちの成績はまだ伸びることが予想された。

また、もう一つ、コロナ禍の影響もあったのか、ＰＴＡ総会の出席者は全戸数の四分の一という課題もあった。

これらのことから、保護者や地域の方との希薄になった関係回復が必要であると考え、幾つかの取組を行った。その一部を紹介する。

三　改善への取組

保護者や地域との関係改善の取組であるために勤務時間外の取組になるので、業務改善の観点から、各取組における職員の参加はあくまでも参加できる人だけという条件で協力を呼びかけた。

㈠　島内ＰＴＡバレー大会への参加（十月）

当初、職員は校長・教頭の管理職を含む職員が五人、保護者も五人であった。しかし、練習が進むにつれ熱意や楽しさの噂が広まり、大会当日は時間の許すときに参加する形態ではあったが、応援まで含め職員十人、保護者十五人が参加し計二十五人が集まった。その結果、十一チーム中三位の成績を収めた。夜にはちょっとした祝賀会が開かれ、保護者との距離が縮まり始めたことが感じられた。

㈡　ＰＴＡ送別会の実施（三月）

本校の転出者は一人であったが、卒業生の保護者の送別会でもあると捉え、校区内各集落の集落長や議員にも開催を案内した。二十人ぐらいの会になると予想していたが、参加者は三十人を超え、時間が足りないほど語り合った。

㈢　朝の立哨の工夫（四月）

本校ではこれまで正門前で立哨を行っていたが、交通量の一番多い交差点に変えた。交通誘導を行いながら、通過する車一台一台に丁寧に頭を下げてあいさつするよう心掛けた。最初はあいさつを返してくださる方は三割ほどだったが、現在では七割を超える方があいさつを返してくださっている。

四　おわりに

これらの取組の結果、ＰＴＡ総会では昨年度の倍以上の半数以上の方が出席された。そして、家庭学習時間の平均も同時期で七十分を超えるようになった。

地域によって差はあるとは思うが、地域の方々や保護者は学校職員と交流し、語り合えることを楽しみにしている。そして、語り合ったことが課題解決につながった。

これは、ＰＴＡとの間やお酒の場に限らず、例えば、職員同士、教師と生徒、生徒同士、校長同士、直接対面して交流することが今後起こるであろう課題を解決させられる一つの大きな手段になるだろう。対面が許された今こそ、交流し、語り合うべきだと考える。

わが校の

学校経営

イサキダキャンパスモデルの提唱

伊崎田小（隅）　大山昭二

職員室のキャッチフレーズを「ひとりでしない　ひとりにしない。」と設定した。前年度と同じである。職員は、このキャッチフレーズを気に入ってくれており、職員室の机上に飾る先生もいる。職場の心理的安全性の確保に一役かっているようだ。

ただ、私にはどこか違和感があった。小学校は、学級担任制である。授業・学級経営・保護者対応など、ほぼ全ての領域を担当する。新規採用教員であってもそれは同じで、奮闘する姿を必死にサポートしている。「ひとりじゃないからね。」と声をかけてくださる。たいへんありがたく、頼もしい教職員集団である。しかしながら「やはりひとりにしていないか？」という懸念が頭から離れなかった。結局のところ「学級担任はひとりになる。」のである。実務においても責任においても最後は「ひとりで背負う。」それが現行の小学校学級担任システムである。

小学校教員の採用者倍率は低下の一途を続け、「ブラック」と揶揄され、人気のない仕事と分類されつつある。残念なことに短い期間で職を離れる新規採用者も少なからずいると聞く。せっかく教育の道を志したにも関わらず本意でない形で学校現場を離れるのは、本当に忍びない。原因の一つに現代の教育の多様性・困難性がある。これほど厳しい教育環境の道を私たちは新採では通っていない。

令和六年度の教育課程編成を考え始めた前年度夏に来年度も新規採用教員が着任する可能性があると考えると、このまま何もしないで、ただ待つことはできなかった。

本校は、令和五・六年度高学年教科担任制モデル校となっている。大隅地区では、このモデル校による「授業を伴う研究成果発表会」を開催することとなっている。

高学年教科担任制を置くねらいは、次の四つである。

・授業の質の向上
・小中学校間の円滑な接続
・多面的な児童理解
・教師の負担軽減

これらのねらいの達成に向けて、本校独自のカリキュラム・マネジメントを研究している。その核となるのが、「全学級単学級における複数学年・複数担任制」いわゆる「チーム担任制」である。

これを軸として、合同学習、一部教科担任制、小中乗り入れ授業、午前五時間、四十分授業、イサキダタイム（学習者主体の授業）を含めたカリキュラムを実施し「イサキダキャンパスモデル」と名付け、取り組み、発表することとした。

本校は、各学年一学級に特別支援学級二クラスの計八クラス、加配は、音楽専科が一人、高学年教科担任が一人の教職員は計十人である。イサキダキャンパスモデルの中核を為すチーム担任制は、学年部ごとにチームを三、四人で組む。子供たちに「担任の先生は誰？」と聞くとそれぞれ三人か四人の先生の名前をとても嬉しそうに挙げる。職員室では、明らかに職員同士の会話が増えている。そのほとんどが児童に関する話であり、情報交換である。チーム担任制ならば必然と言える。とりわけ、新規採用二年目の教諭が発する言葉が目立つ。彼女に「チーム担任制はどうですか？」と聞くと「とっても安心して余裕をもって仕事ができています。」と答えた。この二か月ねらったとおりのスタートが切れており、それぞれにドラマも起きている。

二月の発表会では、「イサキダキャンパスモデル」による子供、教師、保護者それぞれがもつ、ストーリーを発表する予定である。

わが校の

学校経営

「誰もが楽しく学べる学校」を目指して

江内中（北）　福島三鈴

一　はじめに

本校は出水市の西部に位置し、南は国道三号線、北は不知火海に面する自然豊かな環境にある。創立七十八年目を迎え「向学・健康・友愛・克己」の校訓のもと、四十一名の生徒と教職員十二名、市職員二名で心を一つにして教育活動の充実に努めている。平成三十年度からは、隣接する江内小学校と小中一貫校となり、「運動会」「山田樂の伝承」「もち米づくり体験」等の様々な教育活動や両校合同の職員研修、ＰＴＡ活動等を共に行っている。また、保護者、地域ともに教育への関心が高く、自治会長や育成会長を中心として集落がまとまり、青少年育成や地域行事に積極的に取り組んでいる。

二　学校経営の基本方針

小中一貫校としての学校教育目標は「夢をもち、想いを伝える　～九年間の一貫教育で、ふるさとを大切にし、知・徳・体の調和のとれた「江内っ子」の育成～」である。そして、今年度は教職員全員で話し合い、中学校の生徒育成目標として「自ら挑戦し、共によりよく生きる生徒の育成」を掲げた。「誰もが楽しく学べる学校」を合言葉に、生徒も教職員も保護者も、人権意識を大切にしながら、学ぶことの楽しさを味わえる学校を目指し、様々なことに挑戦している。

三　本校の課題と新たな挑戦

幼少期から中学卒業まで、クラス替えがないという環境で、生徒たちはとても親しい関係を築いている。しかし、親しさが故にそこには甘えも生じ、冗談の延長による暴言で互いを傷つけ合うような場面も見られる。対話的な学びや協働的な学びの実践のためには、学級の仲間づくりが不可欠と考え、今年度は人権教育を基盤とした「生徒指導」と、学び合いを楽しみながら、生徒自らの学習意欲を高めることを目指した「学力向上」を両輪に、職員全員で四十一名の生徒を育てるという気概をもって次のことに取り組んでいる。

㈠　いじめ予防プログラム（仲間づくり）

昨年度、教職員全員で「いじめ予防」について学んだ。いじめを科学的に理解し、いじめとは真逆な行動を心がければ、いじめは防げるという。そこで、本校では「いじめ予防プログラム」を「ＳＥＥＤプログラム」と名付け、総合的な学習の時間五時間を、いじめ予防と仲間づくりについて学ぶ時間とした。さらに、生徒会も連動して「ＢＥ　Ａ　ＨＥＲＯ」プロジェクトに取り組んでいる。

㈡　チーム担任制の導入

本校は学年、特別支援学級合わせて五学級を八人の教員が受け持っている。これまで受け持ちを担任、副担任としていたが、今年度は学年に二人ずつの担任を配置した。全ての学級の活動は担任二人が同席してチームで行う。担任としての校務を分け合うとともに、互いのスキルを磨き合い、教師一人一人が当事者意識をもって生徒と向き合い、生徒との信頼関係や教員間の信頼関係を構築することが目的である。

㈢　会議の軽減と「全員朝読書」の実施

学力向上には学びの基盤として「読み・書き」の力が不可欠であると考える。また、職員にとっても、読書による自学は指導スキルの向上につながると考え、これまで行ってきた週二回の朝の十五分間読書に職員・生徒全員で取り組むこととした。そのため職朝は行わず、連絡等は校務支援システムを有効活用することで、その時間を生み出した。学校全体が心を一つにして作り出す静かな時間の共有は、落ち着いた教育環境づくりに大きな効果をみせている。

四　おわりに

昨年、本誌（十一月号）の読書案内のコーナーで紹介された林修氏の言葉に衝撃を受けた。「教育のプロである我々が分かりやすい授業をするのはあまりに当然のこと。（中略）生徒の日常時間に、勉強しようという思いを掻き立てることこそが、我々の真の仕事ではないか。」本来、学びは楽しいものである。学校の教育活動を通して学ぶことの楽しさに気付き、生徒たちが自ら生き生きと学び始めたとき、私たちは初めて、教師の役割を果たしたと言えるのかもしれない。今後も教職員全員で「誰もが楽しく学べる学校」を目指していきたい。

地域の力を生かした学校に

喜入中（市）　岡　元　次　郎

一　はじめに

本校は六つの小学校区からなり、薩摩半島の稜線から錦江湾に至る南北十六km、東西六kmの校区は自然に恵まれた環境の中にある。一方、校区内にはエネオス喜入基地やサッカーJ2鹿児島ユナイテッドFCの練習場もあり、穏やかな地域の中にも近代的なところがある。生徒は徒歩、自転車、JRで登校している。学校の日程がJR時刻表に合わせているところも独特である。生徒たちは素直で、部活等にも元気よく励んでいる。保護者や地域の方々も学校教育に協力的で、地域で生徒を育てようという意識も高い。

二　学校教育目標

「心身ともに健康で、確かな学力と豊かな人間性を身に付け、自他ともによりよく生きる生徒の育成」が本校の学校教育目標である。育てたい力としては「みとおす力」「やりぬく力」「つながる力」を掲げている。生徒向けの重点課題としては「凡事徹底」を掲げて生徒への浸透を図っている。また、地域の力を生かした教育活動への取組も推進しており、学校運営協議会、サポートチーム会議、六小学校区コミュニティ協議会（まちづくり協議会）との連携、鹿児島ユナイテッドFCとの連携などがある。

三　取組の実際

㈠　一年生総合的な学習の時間〔地域を知る〕

喜入地区には鹿児島県にある日本遺産（武家屋敷群「麓」）の一つがある。それが喜入旧麓（もとふもと）地区である。本年度は本校一年生が総合的な学習の時間にこの旧麓地区に行き、喜入地区のボランティアの方々から一つ一つの史跡の説明を受けて学んだ。ボランティアの方々も大勢駆けつけてくださり、生徒のために分かりやすく解説をしていただいた。この取組は喜入地区まちづくり協議会の協力があってこその取組であった。

また、今後はエネオス喜入基地の見学も計画をしている。この取組もエネオス側の協力がないとできないことである。エネオス側も地域や地域の子どもに社会貢献をしてくださる姿勢にあふれている。

㈡　二年生総合的な学習の時間〔探究学習〕

昨年度は三年生で実施したが、本年度は二年生で「鹿児島探究プロジェクト」（かごたん）を実施する。これは企業と学校がコラボした取組で、「地域の良さを発信しよう」をテーマに両者が協働で取り組むプログラムである。昨年度は南九州ファミリーマートと鹿児島ユナイテッドFCの二つの企業とコラボした。また、本校の代表チームがプログラムを通して全国大会にまで出場した。生徒の自己肯定感や自己有用感を高めるとてもよい学びとなっている。本年度は二年生の取組を楽しみにしたい。

㈢　三年生総合的な学習の時間〔職場体験学習〕

地域の全面的な協力のもとでキャリア教育が展開されている。毎年生徒を受け入れているあるカフェでは、中学生が体験学習に来る日を心待ちにしている常連客がいるとも聞いた。逆にそのことを中学生が聞いたら、自己有用感がとても高まるのではと思う。中学生が地域に支えられ、逆に「地域を元気づけられることに気付く」貴重な時間だと考える。

四　おわりに

自分自身、本校に赴任しまだ数か月であるが、喜入地区のもつ活力や教育力に大いに元気をいただいている。まだまだ学校と地域との連携は可能であるとも考える。その一つに部活動の地域移行化がある。喜入地区は部活動地域移行モデル地区にもなっており、移行に向けて少しずつ進んでいるところである。また、令和七年度に本校で開催される道徳の研究大会においても、道徳教育と地域との連携にも視点を置いて取り組んでいけたらと考える。地域の力を生かし、生徒のもつ可能性をさらに伸ばしていきたい。

伝統文化・芸能の伝承
～地域の方々との関わりを通して～

八幡小（北）　永田　昇

一　はじめに

本校は、全校児童二十五名で一・二年、三・四年、五・六年の完全複式学級となっている。児童は素直で教師の指導をしっかり聞くことができ、自然豊かな環境の中で地域の方々に支えられながらのびのびと学校生活を送っている。学習面では学力差が大きく児童一人一人の困り感が違うため学校全体で個に応じた指導に力を入れている。

校区は、薩摩川内市の市街地より約八km北方向に位置し、春は桜、秋は紅葉に包まれる豊かな自然に恵まれた静かな環境にある。八幡地区は十四自治会四百五十戸（令和五年四月）からなり農村地域と新興の住宅地域とに分かれている。

保護者の学校教育に対する関心も高く、交通安全指導やＰＴＡ活動も自主的な運営で取組がなされている。また、地域住民の教育にかける期待も大きく学校の教育活動に対して積極的に協力をいただいている。

二　子供が輝く取組

㈠　児童会の取組

魅力ある児童の育成として本校は「はあと」＆三つの「り」の運動（「は」は、話をよく聞き、「あ」は、あいさつを自分から、「と」は、友達を大切にする。三つの「り」は、「かかわり・やくわり・がんばり」）を推進し合言葉にしている。この目指す子供像は教師からの投げかけだけではなく、児童集会や一年生を迎える会、または、給食時の校内放送等の場で、高学年から自主的にクイズ形式で投げかけているので、低学年まで違和感なく浸透し実践されている。

㈡　自然環境を生かした取組

地域の特性を生かして、ふるさとのよさを理解し、自分なりのふるさと観を高めるとともに豊かな言語力と、互いの思いや考えを伝え合うコミュニケーション能力を育成することを目的に農業体験をさせていただいている。地域の方の水田をお借りし、高齢者コミュニティクラブ三団体に協力いただき、六月に田植え、十月には稲刈りと脱穀まで体験している。また、収穫した餅米で餅つき大会も実施し、高齢者クラブの方々と交流を行っている。子供たちは高齢者クラブの方々とふれあいながら、昔ながらの田植えや稲刈り等を体験することで、食を支える農業の大切さや稲作を産業として継続していくことの難しさを知ることができている。また、活動を支えていただいている地域の方への感謝の気持ちを強くもつこともできている。

㈢　伝統文化の継承の取組

伝統芸能の継承を図りながら地域づくりを推進する活動に取り組んでいる。長年受け継がれてきた伝統芸能「八幡太鼓」を土曜授業の一時間を練習にあて地域の方の指導のもと、秋の校区文化祭へ向けて全校児童で取り組んでいる。三年生以上の迫力ある和太鼓に、一・二年生の竹太鼓も交じり、素晴らしい太鼓の音を響かせている。また、七月末から八月上旬にかけて約二週間に渡って太鼓踊り保存会の方々の指導を受けて、地元の神社の夏の大祭で「八幡太鼓踊り」を奉納している。

三　おわりに

全校児童で地域の方々との関わりを通して、社会性や規範意識を高めることができている。また、関わっていただける方への感謝の気持ちや優しく思いやる心も育まれている。さらに、地域での学びを学校教育活動へ、学校での学びを地域活動へとつなぐことで、ふるさとを誇りに思う心や、ふるさとに貢献したいと願う思いも育まれてきている。

心に残るひとこと

できること、とったらいけないんだよ

小浜小（姶伊）　白田　実

初任校三年目の五月頃。担任をして一か月ほどが経ち、子どもたちの名前を覚え、それぞれの雰囲気もつかみかけた頃。帰りの会の始まる前、私はいつものようにFさんのかばんを準備し、連絡帳に連絡事項を記入してあげようとしていると、隣に座っていたYさんが、

「先生、Fさんのできること、とったらいけないんだよ。」

と、声を掛けてきた。Fさんは特別支援学級に在籍していて、いくつかの授業と、給食や学活の際に、私が担任している学級で過ごしていた。一年生からFさんと一緒のクラスだったYさん曰く、Fさんは先生がしてあげてしまうからやっていないだけで、本当は黒板の連絡を書くことも、帰りの準備をすることもできるということだった。私は、Yさんの言うとおりに、Fさんの連絡帳を開き、鉛筆を握らせて、黒板の字を指さしながらまねするように指示すると、Fさんは上手に字を写し始めた。

Fさんが「できる」ということに気付かされた私は、その後も彼の様子をよく観察してみた。すると、絵を描くのがとても上手なこと、チラシから好きな商品を見付けて値段をメモするのが好きなこと、体で大きくリズムをとるのは楽しかったり嬉しかったりするときであることなど、今まで気付けなかった多くのことに気付くことができた。Yさんのひと言がなければ、Fさんのこんな素敵な一面を見付けられなかったかもしれないと思うと、Yさんには感謝しかない。

二十年以上前の出来事なのに、今でもこの場面をよく思い出す。自分は今、子どもたちの実態をしっかりと捉えることができているだろうか。失敗させないことに力を注ぎ過ぎて子どもたちの成長の機会を奪ってはいないだろうか。

これからも初心を忘れず、子どもたちに優しく寄り添い、見守る姿勢を忘れずに、全ての子どもたちが主体的に自分の力を伸ばしていける、よりよい学校づくりに努めていきたい。

凡事徹底

恒吉小（隅）　水枝谷　琢

教頭職を務めていた頃、当時の校長先生が、全校朝会の度に子供たちに伝えていた言葉である。私は、特に低学年の子供たちには難しい言葉ではないかと感じていたが、校長先生が繰り返し粘り強く話すことで、子供たちなりに理解が進み「凡事徹底」という言葉は子供たちの中に着実に浸透していった。その頃の子供たちや学校の雰囲気は、とても落ち着いていたのを覚えている。

昨年度、校長職になり、校長として初めて赴任した本校の校長室には「あたりまえのことをあたりまえにできれば、子供は伸びる」という言葉が掲げられていた。目にした瞬間、これは「凡事徹底」の教えと合致していると感じた。不思議な縁を感じるとともに、これまで仕えてきた先輩校長先生方の背中を見る思いがした。

突き動かされるように、次の全校朝会の場で「みなさんに求める姿として、この凡事徹底という言葉を紹介します。」と、子供たちに話をする私がいた。全校朝会で話をしたその日から機会あるごとに繰り返し、子供たちに「凡事徹底」の話をした。あの頃の校長先生の姿を思い浮かべながら。

本年度五月の半ば頃、用事があって本校を訪れたある校長先生から「先生の学校はとても雰囲気が落ち着いていて和みますね。」と、言われた。何よりのお褒めの言葉をいただき嬉しく感じると同時に、深く先輩校長先生に感謝した。

私は校長職以前に教頭職を四校十二年務めた。その経歴を人に話すと「それは大変でしたね。」と、よく言われるのだが、十二年間にわたって、その時々の校長先生方のすぐ側で、職務への向き合い方や考え方、所作・振る舞い・言動を学ぶことができた経験は、私にとってかけがえのない大きな財産だと感じている。さらに、〝教諭であった頃にそのような学びを体験することはなかった　この学びこそが教頭職の一番の魅力だ〟と、思うことができた私は、とても幸運だったとも感じている。

センス・オブ・ワンダー

島間小(熊)　南　健

「校長先生！ほら、カナヘビ！かわいいでしょ。」

そう言いながら、校庭の片隅で見つけたカナヘビを手に載せ、無邪気に見せてくれる子供たちの目は本当に輝いている。

かつて、少年自然の家に勤務する機会を得て、六年間、子供たちの体験活動に携わった。海や川そして山、県内の豊かな自然の中で、子供たちと寝食を共にしながら様々な体験活動を実施してきた。

「センス・オブ・ワンダー」

先輩研修主事が、主催事業を企画する上で、もっとも大切にしてきた言葉であり、プログラムを考える上での指針であった。

「センス・オブ・ワンダー」という言葉は、「自然に触れて深く感動する力」という意味をもつ。この言葉は、環境保護運動の世界的な先駆けであるアメリカのレイチェル・カーソンの書名としても広く知られている。その著書には、次のように記されている。「美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたび呼び覚まされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。」

誰もが子供時代を振り返ると、自然の中で、このように感性を揺さぶられた体験があることに思い当たるのではないだろうか。

これまで、様々な調査から、幼少期に自然体験が「かなりある」「ある」に分類されたグループの方が、「積極性」「責任感」「自然への関心」「協調性」が高いことが示されていることは周知のことである。子供たちの「感動したり、驚いたり、不思議に思ったりする感性」を育てることは、様々なことに興味をもち、「もっと知りたい」「やってみたい」「できるようになりたい」という思いにつながっていく。そんな子供たちの「センス・オブ・ワンダー」を大事にした教育が展開できるよう今後も取り組んでいきたい。

ちゃんと伝わりますよ

頴娃高　北吉　大

今年の四月、現任校に赴任した。勤務校が変わるたびに、新しい出会いや環境に期待が膨らむと同時に、はたして上手くやっていけるのだろうか、考えや思いはちゃんと伝わるだろうかと不安を感じる自分もいる。そして、そのたびに、思い出す出来事がある。

当時私は、男子ソフトテニス部の指導に携わっていた。地方の小規模校で、ソフトテニスが好きな地元の生徒だけで構成された部活動であったが、熱心な保護者の協力と、学校の枠を超えてお互いに切磋琢磨できる先生方のおかげで、それなりに結果が出せる活動ができていた。

ところが、ある年度の生徒たちが全く結果を出せなかった。練習方法が合わないのではないかと試行錯誤を繰り返したが結果は変わらなかった。

解決策が分からないまま臨んだ県大会の会場で、ある卒業生に会った。彼は高校生の時から、他校の教員である私にもよく挨拶をしてくれ、私の方からも話しかけやすい生徒だった。大学生になっていた彼は、母校の応援に来ていた。お互いの近況を話していく中で、いつの間にか私は「今指導している生徒には、伝えたいことの十分の一ぐらいしか伝わっていない気がする。」と話していた。すると彼は、「十分の一は伝わっているのですね。だったら同じ話を十回すればいいですよ。大丈夫、先生の思いはちゃんと伝わりますよ。」と返してきた。はっとさせられた瞬間だった。経験を重ねるにつれ、いつしか相手に「伝える」努力を忘れ、一方的に「話して」いた自分に気付かされたこともちろんだが、それを生徒（しかも他校の卒業生）に指摘されたことに衝撃を受けた。この出来事は自分への戒めも含め、深く心に刻まれている。

ちなみにその生徒は、現在は母校で教員として頑張っていて、うれしいことに現在も交流がある。気恥ずかしくてちゃんと伝えていないが、私にとって若き「心の師」である。

ある日の校長講話

言葉を整えたい理由

花野小（市）山　下　佳　子

私が「花野小の言葉を整えたい」と考える理由を話します。

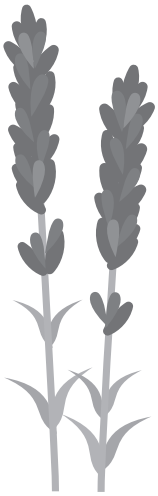
昔から「言葉には不思議な力が宿る」と考えられています。このことについては、信じる信じないに関わらず、結婚式の時や受験の前には不吉なことを連想させる言葉を控えますよね。これは、言葉が相手の頭に悪いイメージを植え付けないように配慮しているのです。

ある研究によると、人は後向きな言葉を聞くと、脳のやる気スイッチがオフになってしまうといいます。だから、救急医療の現場では「仕方がない」「無理」といった後ろ向きな言葉を発することを禁止する病院もあります。急患を助けるために、無理をしてでも全力を尽くさなければならない現場で、誰かが「仕方がない」「無理だ」などの言葉を発すると、その現場スタッフのやる気スイッチがオフになってしまい、助けられたはずの患者も助からないからです。

また、サッカーの試合で一点差で負けていて、後半も残り時間わずか。そんな時、誰かが、「ラストワンプレーで絶対に追いつけるよ！」と言うか「もう無理だよ。絶対追いつけない。」と言うかで、結果に大きな違いが生まれると思うのです。

後ひと踏ん張りという時は、学校生活の中ではよくあります。そんな時、自分の言葉が自分自身やクラスメイトに対して、良くも悪くも影響を与えるという自覚をもってほしいです。特に学校などの集団生活の中では、皆さんが発する言葉が、その集団内のやる気や雰囲気にかかわる重要な要素になるのです。これが私が「花野小の言葉を整えたい」と語る理由です。

たとえキツイ時にも、前向きな言葉を意識的に声に出し、友を励ますことができるような人に育ってほしいと思い、この話をしました。



ケーキのないクリスマス

伊集院小(日) 渦　尾　文　輝

私には、「ごめんなさい。」が言えなかった苦い記憶があります。

それは、私が小学三年生ぐらいの頃、クリスマスの出来事でした。私の家は、あまり余裕のある方ではなかったので、クリスマスはとても質素なものでした。クリスマスプレゼントは、一週間後のお年玉にまとめられても何の不満もありませんでした。ただただ、ケーキが一つあればいいのでした。

そのケーキは、毎年クリスマスイブの日に母が大事そうにかかえて帰ってきました。きっと私たちの喜ぶ姿が見たかったのでしょう。母は少々奮発して少しだけサイズの大きなケーキを買ってくれました。これが毎年変わらないわが家のクリスマス風景でした。

ところが、この年、大変なことが起こりました。ケーキの予約を忘れていたのです。

「ごめんね。お母さんのせいで・・・。」

母は、お店を回ってケーキが残っていないかを尋ねて歩いたそうです。夕方暗くなるまで一人で。

ケーキのないクリスマス。楽しみが消えてしまった驚きと悔しさから、私はこともあろうか何度も何度も母を責めました。きっと年末にかけての仕事が忙しく、人一倍がんばり屋の母は、この年あまり余裕がなかったのでしょう。仕方がないことでした。それなのに、私は何とひどいことをしたのでしょう。しかも素直になれずに「ごめんなさい。」という一言ですら言えなかったのです。

それから何十年も経ちました。街中でクリスマスソングが聞こえてくると、そのことを思い出して辛くなることがあります。

今、母は宮崎のいなか町で一人のんびり暮らしています。幸い、今も元気でいてくれています。今度の正月、帰省した私がしなければならないことがたくさんありそうです。

「行ってきます。」と言って家を出たなら…

～交通安全教室後の講話～

喜念小(大) 平　山　　啓

今朝、みなさんはきっと、お家の方々に「行ってきます。」と言って学校に来たんじゃないかと思います。

もし、今日の帰り道、交通事故にあってしまったら、どうなるでしょうか。例えば、「友達とふざけ合っているうちに、道路へ飛び出してしまい、車にはねられてしまった。」とか、「とても急いでいたので、左右確認をしないで道に出てしまい、バイクにはねられてしまった。」など、万が一にでも、事故にあってしまったなら、どうなるでしょうか。

交通事故にあってしまったら、「朝、行ってきますと言ったきり、二度とお家に戻らなかった。」ということになりかねません。「行ってきますと言って家を出たきり、二度ともどってこなかった。」などという悲しいことは、絶対に

あってはなりません。

お家の方々にとって、みなさんは宝物です。別の言い方をすれば、生きる希望です。宝物であるみなさんを失うなど、お家の方々には考えられないことですし、耐えられないことです。「行ってきます。」と言って家を出たなら、絶対に、絶対に、「ただいま。」と言って帰らなければいけません。

今日は、交通安全教室で、交通安全について学びましたね。「左右をよく確かめて横断歩道を渡る。また、道に出る。」「絶対に飛び出さない。」「自転車に乗る時にはヘルメットをかならずかぶる。」など、安全に過ごすための方法や命を守るための方法を学びました。必ず守りましょう。計算や漢字の間違いは消しゴムで消してやり直せます。でも、道路での間違いは、二度とやり直せないかもしれません。

とっても大切なことだから、もう一度言いますね。「行ってきます。」と言って家を出たなら、必ず、「ただいま。」と言って帰らなければいけません。今日勉強した交通安全について気を付けることを必ず守りましょう。

話のひろば

主体的に選択・決定するプロセスの楽しさ

山下小(北)
川瀬順一

新型コロナウイルス感染症の区分が二類から五類へ移行して一年余りが経過した。近頃のテレビや新聞は、週末や連休を利用して、観光地や行楽地をたくさんの人が訪れ、賑わっている様子を伝えている。訪日する外国人の増加に伴い、インバウンドやオーバーツーリズムという言葉もよく盛り込まれるようになった。非日常であるレジャーや旅行は、気分転換の絶好の機会でもあるが、楽しいという感情が優先してしまい、何かと気配りがおろそかになると、周囲の人に危険や不快な思いをさせてしまうことがある。迷惑行為については、年相応に公共のマナーを身に付けているか、自戒せねばと思う。

教諭の頃は、趣味を尋ねられたら、プチ旅行と答えていた。安近短の九州・沖縄プランが基本で、ご当地の史跡や名所を巡ったり、郷土料理に舌鼓を打ったり、温泉に浸かったりして日常からの解放感を満喫した。奮発して北海道を旅したこともある。当時は、鹿児島と札幌を結ぶ直行便があり、格安航空券を購入して、秋の北の大地を初めて踏みしめた。バスの窓から見える山の風景は、赤や黄や茶色に紅葉している樹々に針葉樹の緑色が混じり、言葉では、表現しがたい美しさで、思わず見とれてしまった。札幌駅前に着くと、コンビニで軽食を購入することにした。レジ横のホットメニューコーナーで、ザンギという未知なる食べ物に興味をひかれ、店員さんに尋ねたら、鶏の唐揚だと教えてくれた。その土地の特有の呼び方を知ることは面白い。その後、季節を変えて三回訪れた。函館山からの夜景、雪景色の小樽運河、大通り公園のイルミネーションは、今でも目に焼き付いている。時季を選んで、よかったと実感した。

旅行は、目的地・期日・交通手段・宿泊施設に予算等、計画を立て、決めていく過程も楽しいものである。

さて、学習者主体の授業づくりのポイントの一つとして、子供が選ぶ・決める学びが挙げられる。授業では、道具や活動、学習形態、学習時間、解決方法・考え方、課題・めあて等、子供に多様な選択肢による自己選択や自己決定を委ねる場を設定する必要がある。子供たちも自らの学びを調整できる教育活動を楽しんでほしいと思う。

ことだま

龍瀬小（大）
今村　宗一郎

たった一言だけど、何気ない言葉だけど、相手を幸せにすることができる。考え方や生き方、人生そのものに影響を与えるそんな言葉を今までの人生でどれだけ与えられただろうか。

ある女の子の担任をしたときのことである。その子は、大好きなお兄さんと一緒に町の水泳記録会に出場できることを喜び、練習に励んでいた。しかし、お兄さんが足を骨折し、出場することができなくなった。そのため、練習にも身が入らず、やる気がなくなっていた。そんなとき私が、

「お兄さんの分までがんばらないといけないね。」

何気なく言った一言で元気が出たようで水泳記録会に出場することができた。その後、その女の子やお母さんから感謝の言葉をもらったことを覚えている。本当に何気ない些細な一言であったが、大きな力を与えることができたようだ。

また、私自身が励まされ勇気をもらった言葉がある。それは、長女の出産のときのことだ。長女の出産は、母親の破水があり、それでも自然分娩を待っていた。しかし、なかなか陣痛が無く、ウィルス感染が心配される三日目にやっと産まれてきた。しかも産まれた日は四月四日だ。産まれたばかりの子がウィルス等に感染していないか、健康に育ってくれるのか、誕生日の、「四」という数字が、縁起が悪く思えて、それすらも不安に感じ、我が子の将来を憂えていた。そんなとき、看護師さんから

「おめでとうございます。四月四日生まれだから四（し）が合わさっているので、この子は幸せな子になりますよ。」

と言われ、涙が出るくらいうれしかったことを覚えている。難産で健康面に不安を抱え、産まれた月日の数を縁起が悪いと思い込んでいた私たち夫婦の気持ちをたった一言で変えてくれた。やはり、「ことだま」とはよく言ったものである。

現在、校長として子どもたちと直接関わる機会は少ないが、これからも、子どもや職員、保護者等に気持ちを前向きにもてるようなそんな言葉を掛けていきたい。

”知るは、楽しみなり“

大姶良中（隅）
有馬　雅彦

この職に就き、いろいろなことを考えるようになった。自分の教え子たちに「人を思いやる心をもって」とか「いつまでも健康で」とか、たくさんの思いをもって

接してきた。しかし、一つだけ、これだけは叶えてほしいという思いがある。それは、「自分でお金を稼いで、衣・食・住を自分の力で確保できる人になってほしい。」という思いである。

私が高校から大学くらいの頃「クイズ面白ゼミナール」というテレビ番組があった。大学のゼミを意識したセットで、進行を務めるアナウンサーが「主任教授」で、解答者が「生徒」という設定でクイズが出される番組である。内容は理科や歴史など多岐にわたり、私にとってとても楽しみな番組であった。番組は主任教授の次の言葉で始まる。「こんばんは、皆さん。〝知るは楽しみなり〟と申しまして、知識をたくさん持つことは人生を楽しくしてくれるものでございます。」と。しかし、とても楽しみにしていた番組だったが、前触れもなく、突然最終回を迎え、寂しかったことを覚えている。最終回を迎えたその年の四月に私は新規採用教員として中学校理科の教員になった。あれから約四十年近くが経ち、教育も大きく変化している。

先日、ある動画を目にした。ある高校の入学式でＰＴＡ会長が祝辞を話しているものである。その中で「知識そのものには価値はなくなっている。なぜなら、分からなければすぐに調べることができる。」と。ここだけ取り上げると、「何言ってんだ。」と思う人も出ると思うのだが、最後に「だから勉強してください。」とまとめている。この「だから」の前には、こんな言葉があった。「豊かな人生を歩んでほしい。」と。つまり、「知識」自体には価値はなくなっていくが、豊かな人生を歩むためには「学び」というものは必要なのだということだ。

私にとっての資質・能力の三つの柱の一つである「学びに向かう力・人間性」を育む原動力は、昔私が感じていた「ワクワク感」だったような気がする。今の学校の授業に、この「ワクワク感」のようなものを生徒は感じているだろうか。「知ることが楽しい。」と思えるような授業を実践することが「学びに向かう力・人間性」にとって大切なことだと自分にも言い聞かせながら、役職定年後の授業をがんばりたいと思っている。

■野村萬斎　著

狂言サイボーグ

青戸小（南）濵　元　弘

予測困難な時代に、自分のよさや可能性を認識し、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の担い手となることができるようにする。

このような能力を子どもたちに身に付けさせるには、どのようにすればよいのか。日々悩んでいた。そんな時に出会った本である。

今年の年明けから、狂言を観るようになった。鹿児島でなかなか公演がないので、県外あちらこちらに出かけている。その中で幸運なことに二回ほど、著者と会うことができた。さらに、この本のイメージが膨らんだ。冒頭に出てくる「狂言とコンピュータ～序にかえて～」に中央教育審議会で、教養について話をしたことが出てくる。ここが特に心に響いた。

狂言師が舞台をつとめるための教養は「型」であること。その「型」を身に付ける幼い頃の稽古は、個性の尊重などとは無縁であること。これら一連の流れをコンピュータの「プログラミング」に例え、誤作動しないために徹底してプログラミング（稽古）して狂言師としての機能・「型」を身体にたくさん植え込んでいくこと。その「型」を個性・経験でアレンジしながら使っていくことで表現になること。このことが自分の身体を気に入ったコンピュータにしてくれていること。

さらに、次のように書かれている。「私にとっての教養とは、『生きていくために身につけるべき機能』のことである。知識として暗記したものは教養ではない。」と。この序章は、学校経営説明の中で引用し、全ての職員と共有した。本書は、序章の後、「狂言と『身』『体』」、「狂言と『感』『覚』」、「狂言と『性』『質』」と続く。

教えるべきことは、しっかり活用させながら教え身に付けさせる。そこが身に付いてこそ、個性豊かに、この予測困難な時代をよりよく生き抜き、社会的に自立していく子どもたちに育つのではないかと思わせてくれた本であった。

ちくま文庫　価格　九百二円

■谷川俊太郎　文
■和田　誠　絵

ともだち

岳南中（熊）永　野　由可里

子どもたちに四月のスタートにふさわしい詩を紹介したいと思い、探したところ、「ともだち」という絵本に出会った。「ともだちって」「ともだちなら」「ひとりでは」「どんなきもちかな」「けんか」「ともだちはともだち」「あったことはなくても」の七つのテーマで親しみやすい絵と短い文章で、分かりやすく書かれている。音読すると五分くらいなので、全校朝会で読み聞かせをすることにした。人権週間によく紹介される本だと聞いていたので、知っている子どもも多いのではないかと思ったが、みんな初めての様子だった。全員が顔を上げて、絵に注目しながら、真剣に聞いていた。文も絵もシンプルに表現されているので、ゆっくりと心にしみわたり、自分ならと自分事のように思い出したり、想像したりできたのではないかと思った。「友だちって風邪がうつっても平気だって言ってくれる人。友だちって一緒に帰りたくなる人。好きなものが違っても友だちは友だち。」「友だち」とは、何かを考え、問い掛けてくる。絵本の後半では、世界の子どもたちの写真が載っている。車椅子に乗ってまっすぐにこちらを見る子や砂地に座り込む子も「会ったことはなくてもこの子はともだち」。友だちとは一体何かを考えてきた子どもたちは、この友だちに何ができるだろうと思ったに違いない。自分が何をしてもらうかではなく、何をしてあげられるかという視点で、考えられたのではないかと思う。また、子どもたちばかりでなく、教師である大人も深

く考えさせられた。「けんかはしたっていい。でも一人をたくさんでいじめるのは卑怯だ。お母さんやお父さんや先生にいいつけるのはずるいんじゃないかな。」とある。子どもたちには「いいつけるのではなく、『相談』をしてほしい。相談するのは、ずるくないし、とても大切なことなんだよ。」と付け加えた。子どもにも大人にもお薦めの絵本だ。ぜひ、手に取って声に出して読んでみてほしい。

玉川大学出版部　千三百二十円

■稲盛和夫　著

京セラフィロソフィ

枕崎高　吉　満　義　文

今から九年前の平成二十七年夏、教頭として臨んだ研修が今の学校経営の糧となっている。研修の内容は、現在の京セラ株式会社を創業した稲盛和夫氏の経営哲学や経営手法を本書をもとにしながら、ＤＶＤ視聴や講演、グループワーク等を行い、「学校経営」について学ぶものだった。

稲盛和夫氏の著書「京セラフィロソフィ」には、京セラを経営していく中で、困難に遭遇し苦しみながらも、これらを乗りこえてきたその時々のエピソード、また、仕事や経営に対する考え方、実践してきたこと、さらに、人生について自問自答しながら生まれてきた稲盛氏の生き方が綴られている。

稲盛氏は、鹿児島大学を卒業後、京都の碍子製造会社に就職した。しかし、上司である技術部長と技術開発の方針の違いから衝突し、二十六歳で退社。その後、二十七歳の時、資本金三百万円、従業員二十八人で京都セラミック株式会社を設立した。その京都セラミック株式会社はわずか六十五年の間に、資本金一千百五十億円、従業員七万九千人、グループ企業二百九十三社となり、今や、日本が世界に誇る大企業へと成長を遂げている。この他、稲盛氏は、その経営手腕で、第二電電（現ＫＤＤＩ）を設立し、七十八歳の時、経営難に陥った日本航空の再建の任を無報酬で引き受け、わずか二年で再上場に導いた。

現在、校長として「学校経営」を行う上で、正直なところ、自らが判断したことが適正であっただろうか、方向性は間違っていないだろうか等、自問自答することもある。その時、改めて九年前の研修が思い起こされる。本書は自宅の書棚でしばらくの間休眠中であったが、現在は、私の傍らで明日への活力源となっている。

学校は、生徒・職員・保護者・地域の方々等、多くの「人」との繋がりで成り立っている。稲盛氏は、本書の中で「感謝の心をもつ」「常に謙虚であらねばならない」と記している。この言葉を胸に、職員とともに心を通わし、思い描く学校像に近づけるよう、務めていきたいと思っている。

サンマーク出版　二千四百円

趣味・文芸

趣味も仕事も一生懸命

納官小（熊）　奈良博一

「私の一番大切なものです。」と学年主任の先生が茶色い布袋を取り出し、たくさんの種類の笛を見せてくれました。話を聞いてみるとなんとバレーボールのA級審判資格を取得されていて中高生の試合の審判をしたり、ワールドカップの審判をしたりする時に使っている笛だと嬉しそうに話してくれました。学校では素晴らしい学級経営をされ、アイディア豊富な熱血教師である学年主任の先生の姿に憧れていましたが、趣味でもプロの審判としてバレーボール界を支えている先生だと知り、私もそういう存在でありたいものだなあと強く思いました。

その後、小さい頃から犬好きな私は、家族と一緒に鹿児島市の公園で開催された犬のイベントを見学しました。広場では、犬と人間がカラフルな円盤を使って楽しそうに演技する姿が繰り広げられていました。見ているうちに自分もやってみようかなと思い始め、演技を見ている途中で大型犬が「一緒にしようよ。」と言わんばかりに私にすり寄ってきました。そのドッグスポーツとの出逢いからドッグスポーツの世界に引き込まれ、気がついたらドッグスポーツ選手を育成するドッグスポーツクラブを立ち上げ、学校では教務主任として日々校務をこなしながら、休日にはドッグスポーツ選手として日々トレーニングに励み、競技会に参加したり動物愛護フェスティバルやドッグショーなどのイベントを企画運営したりしてドッグスポーツの振興を進めていました。今振り返ると、当時の校長先生をはじめ、学校の先生方の御理解があったから取り組むことができたのだと深く感謝することでした。

一番大変だったことは、犬とのトレーニング場所がなく、人気のない夜間に広場などでトレーニングしたことや公式の競技会が福岡や四国、関東などで開催されるために車での移動距離が長く、犬にも人間にも負担が大きかったことです。関東の大会で車中泊をしていると真夜中に何度も警察官に職務質問をされたことが昨日のことのように思い出されます。

一番嬉しかったことは、南九州市のキャンプ場にドッグランを開設できたことです。キャンプブーム到来の年に、キャンプ場のオーナーとクラウドファンディングを企画し、鹿児島県内初のアスレティックドッグランを開設すべくSNS等で告知し幅広く支援を呼びかけました。最後まで目標を達成できるかどうか不安でしたが、全国のドッグスポーツ仲間の支援もあり目標の金額を見事にクリアしました。網やフェンス、木材などドッグラン開設に必要な資材を購入し、クラブメンバーと手作りのアスレティックドッグランを完成することができました。オープニングセレモニーでは、市長さんにも来場していただき、多くの愛犬家の皆様と一緒にお祝いをすることができました。現在も愛犬家たちの交流の場としてたくさんの方々に利用されています。

いろいろなことがありましたが、十八年間続けてきて全国の素敵な選手たちとの出会いや世界のプロのトレーナーとの出会いもあり、現在は、素敵なメンバーに恵まれクラブ運営を続けることができています。

現在、ドッグスポーツクラブの活動として毎月二回ほど鹿児島市の公園をお借りしてドッグスポーツ公開トレーニングというイベントを実施しています。ディスクドッグスポーツやフライボール、ドッグダンスなどのトレーニングを公開し、来場者にトレーニングの様子を見ていただいたり、スポーツドッグと触れ合ったりしていただくことを通してドッグスポーツの普及を進めています。公共の場所をお借りしての定期的なドッグスポーツ公開トレーニングは、全国的にみても珍しく鹿児島が初だと思います。鹿児島市の公園関係者や管理されている企業様への感謝も絶えません。

十八年変わらぬクラブのコンセプト「素敵で優れた選手と犬の育成・安心安全な大会や練習会の実施とドッグスポーツの推進・愛犬家のマナーの向上」を掲げ、今後は小・中学生のドッグスポーツ選手の育成やクラブ会員募集などに力を入れていけたらと思います。教職生活もドッグスポーツクラブ運営もあと十五年間は頑張っていきたいと思います。

郷土の紹介

「日本一長い村」での教育

小宝島学園（郡）牧　野　忠　彰

一　はじめに

十島村は、屋久島と奄美大島という二つの世界自然遺産に挟まれた村で「としまむら」と呼ぶ。かつて三島村を含めた有人十島を「じっとうそん」と呼んでいたが、昭和二十七年の日本復帰後は三島村と分離し「としまむら」と呼ぶようになっている。トカラ列島という十二の島々で構成され、有人七島と無人五島が南北約百六十㎞に及ぶ「日本一長い村」である。

二　としまスタイルの小中一貫教育

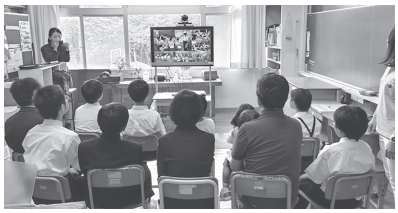
十島村内の有人七島とは、北から口之島・中之島・諏訪之瀬島・平島・悪石島・小宝島・宝島であり、各島に一つずつ学校がある。これまで小中併設校であったが、今年度四月から義務教育学校としてスタートした。九年間の枠組みの中で、各島の特色を生かしながら、「とことんこだわり」「しまのよさを」「まなび伝えよう」をキーワードに、全ての世代の学びの場において「共に生き　共に育つ」教育を推進している。

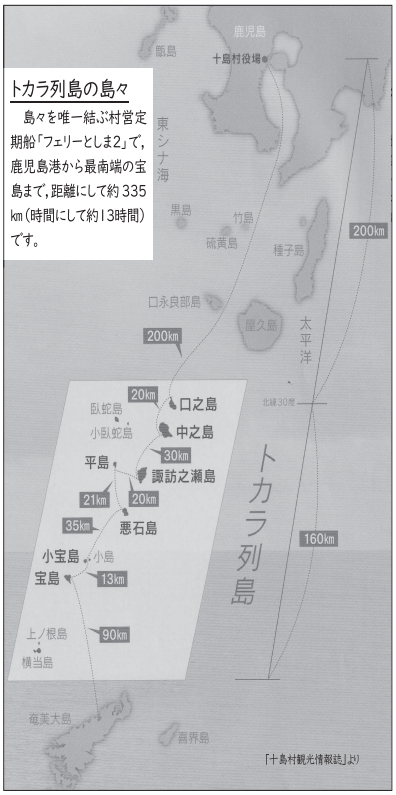
本村は留学制度を設けており、他県・他市町村からの山海留学生と十島村出身の児童生徒が約半数ずつ在籍する。また、ＡＬＴが各校一名ずつ配置されている。各校では、児童生徒、学校職員、保護者、地域住民が参画し、それぞれが共に成長し、共に地域を創るという理念のもと、子ども同士、子どもと大人の様々な関わりを大切にする中で、子どもたちに「生き抜く力」を育む学校教育を展開している。

三　トカラ集会と連合学習

村内の学校間は海で隔てられていることから、直接出会って交流することが厳しい環境にある。ＴＶ会議システムを活用し、年七回、「トカラ集会（土曜授業の朝二十分間）」を実施している。担当校が進行を務め、我が校の紹介をしたあと、他校に感想を求めるといった内容である。

また、村の支援を受け、年一回本土入りして、七校による「連合学習」を行っている。前期課程は「集合学習」と「修学旅行」を隔年で実施。後期課程は「職業体験学習」「交流学習」「修学旅行」を三年サイクルで実施している。悪天候により、延期や延泊を余儀なくされることが多いが、児童生徒にとっては貴重な体験学習となっている。今年度の後期課程は、日置市立伊集院中・伊集院北中と「交流学習」を行い、日頃味わうことのできない大勢での授業を体験した。





トカラ列島の島々

島々を唯一結ぶ村営定期船「フェリーとしま2」で，鹿児島港から最南端の宝島まで，距離にして約335㎞（時間にして約13時間）です。

四　トカラ科

児童生徒に主体的な学びの機会を与えるため「トカラ科」が新設された。主に総合的な学習の時間を活用し、自分の暮らす島の自然や祭りなどを題材に歴史や文化を調べ、校区文化祭等で発表する。本校では、伝統野菜「宝カブ」について、専門の外部講師を招き、種まきから収穫まで学習した。

五　おわりに

十島村は「日本最後の秘境」と言われる。学校行事を含め、生活の全てが週二便のフェリーに左右される。しかし、不便であるが不幸ではない。十五の「島立ち」に向けて九年間の義務教育学校としての使命感を持ちつつ、一方で島に戻りたい「島帰り」も意識し、教育に当たっている。「トカラ科」をはじめとする島ごとの特色ある教育活動を体験することで、児童生徒が住む島に、自信と誇りを抱いてくれることを願う。秘境の地にある学びの素材を発掘し、活用し、「十島はひとつ」を合言葉に、荒波を越えて独り立ちする人間を育成していきたい。

思いやりのある一言は ずっと心を温める。

心遣いを伝えられれば
その人は助けられたり
励まされたりする。

丸池湧水　©K.P.V.B

提供「僕の贈りもの　日めくりカレンダー」
松山　武史　氏

一般財県校長会館だより

令和六年度、一般財団法人鹿児島県校長会館としての登記が六月二十四日に完了し、六月二十八日に県知事宛て「公益目的支出計画実施報告書」等を提出しました。本年度も、「鹿児島の教育」等の資料刊行と、教育講演会を開催し、本県教育の充実発展に努めます。

教育長異動

○新任　令和六年七月六日付
長島町　田淵　省二氏
（前湧水町立栗野中学校長）

○新任　令和六年七月十三日付
瀬戸内町　盛島　正行氏
（前鹿児島市立南小学校長）

○再任　令和六年六月二十七日付
曽於市　中村　涼一氏

○再任　令和六年七月一日付
徳之島町　福　宏人氏

※「訂正とお詫び」

六月号に記載の錦江町教育長　鎌田広文様、奄美市教育長　向美芳様の再任は新任の誤りでした。訂正してお詫び申し上げます。

編集後記

熱中症警戒アラートが六月下旬から発表され、危険な暑さが続いています。一学期末、子供たちにとって楽しい教育活動を実施するにあたり校長として気がかりなのが熱中症対策ではないでしょうか。本校も熱中症対応マニュアルを見直し、万全の対策が取れるようにしています。

さて、夏休みです。楽しみにしているのは、パリ二〇二四オリンピック・パラリンピックです。スローガンを「広く開かれた大会」とし、その実現のため「セレブレーション（祭典）」「レガシー（遺産）」「エンゲージメント（全員参加）」の三つの柱を立てています。開会式や競技の開催場所は従来のスタジアムの中ではなくパリの有名な史跡や建築遺産を舞台に行います。開会式はセーヌ川です。選手たちは船に乗ってパレードし、エッフェル塔を望むトロカデロ広場へ向かうそうです。競技は、歴史的な建造物を背景に、楽しめます。鹿児島に居ながら、スポーツの価値を享受し、感動を味わい、選手や観客等との出会いを楽しみ、パリの素晴らしい思い出ができそうです。

鹿児島の教育の読者の皆様の夏休みが、日頃の多忙から少し離れて、御家族や御友人の皆様との触れ合いや普段はなかなかできないことに挑戦する時間になればと思います。

最後になりましたが、今月も御多用の折、玉稿をお寄せくださった校長先生方に熱く御礼申し上げます。

山里浩美（花尾小学校）